

# 中野沼水生動植物群についての調査報告書

2019

邑楽町教育委員会

# 目次

序

目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 中野沼の地勢と沿革	
2-1 中野沼の地勢	2
2-2 中野沼の沿革	2
第3章 2016年中野沼水生動物群調査	
3-1 調査概要	5
3-1-1 調査目的	5
3-1-2 調査期日・調査地	5
3-1-3 調査方法	7
3-1-3-1 水生動物調査	7
3-1-3-2 トンボ相調査	7
3-2 調査結果	8
3-2-1 調査結果概要	8
3-2-2 重要種	11
3-3 まとめ	13
3-3-1 過年度調査結果との比較	13
3-3-2 今後の調査及び保全対策について	14
資料	
資料1 底生動物調査確認種目録	16
資料2 トンボ相調査確認種目録	18
第4章 2017年中野沼水生動物群調査	
4-1 調査概要	19
4-1-1 調査目的	19
4-1-2 調査期日・調査地	19
4-1-3 調査方法	21
4-1-3-1 水生動物調査（マミズクラゲ調査）	21
4-1-3-2 トンボ相調査	21
4-2 調査結果概要	22
4-2-1 調査結果概要	22
4-2-2 重要種	25
4-3 まとめ	27
4-3-1 過年度調査結果との比較	27

4-3-2 今後の調査及び保全対策について	28
資料 トンボ相調査確認種目録	30

## 第5章 中野沼水生植物群調査

5-1 はじめに	31
5-2 調査目的	32
5-3 調査の範囲と方法	33
5-4 調査結果	33
5-4-1 調査結果の概要	33
5-4-2 中野沼の植物目録	34
5-4-3 中野沼に特筆すべき植物	42
5-4-3-1 スジヌマハリイ	42
5-4-3-2 ガガブタ	42
5-4-3-3 タタラカンガレイ	43
5-4-3-4 アオヒメタデ	43
5-4-3-5 コギシギシ	44
5-4-3-6 シソ科の植物	45
5-4-3-7 サワオトギリ	46
5-4-3-8 ヘラオモダカ	47
5-4-3-9 タコノアシ	48
5-4-3-10 カヤツリグサ科	49
5-4-3-11 ミソハギ、エゾミソハギ	51
5-4-3-12 アサザ	51
5-5 考察	52
5-6 おわりに	52
謝辞	52
参考文献	53
資料	
資料1 中野沼の植物相調査リスト2017	56
資料2 中野沼腊葉標本一覧2017	63
資料3 全国RDB指定状況	71
資料4 2016年調査 植物相詳細位置図	77
資料5 2017年調査 植物相詳細位置図	85
資料6 東沼水深調査	93
資料7 東沼タコノアシ密生度調査	95
資料8 中野沼のスジヌマハリイについて	97
資料9 中野沼のガガブタについて	107
資料10 中野沼のミソハギ属について	115
資料11 調査区域図	119
資料12 中野沼の水生植物群落 2016-2017 調査報告書(写真版)	125

## 調査者・執筆者一覧

第1章	調査に至る経過	P 1	邑楽町教育委員会	網倉雄二郎
第2章	中野沼の地勢と沿革	P 2～ 3	邑楽町教育委員会	網倉雄二郎
第3章	2016年中野沼水生動物群調査	P 5～18	株式会社緑生研究所	小林 達彦
第4章	2017年中野沼水生動物群調査	P19～30	株式会社緑生研究所	小林 達彦
第5章	中野沼水生植物群調査	P31～155	邑楽町文化財保護調査委員	青木 雅夫

## 序

中野沼が平成 11 年 7 月に町天然記念物として指定されてから、早くも 20 年が経とうとしています。この間、中野沼周辺は親水公園として美しく生まれ変わり、遊歩道や管理棟、水質浄化設備などが整備されました。現在も、憩いの場として広く町民に親しまれ、散歩する姿が絶えません。

中野沼では、平成 25 年度から教育委員会が文化財保護伝承事業の一環として外来魚駆除大作戦を開催しています。毎年 200 人もの参加者が集まり、特定外来生物のオオクチバスやブルーギルなどの駆除と環境学習にご協力いただいています。この事業では、平成 29 年度からは特定外来生物の飼養許可を得ての「ブラックバスお引っ越し大作戦」を行い、全国でも先駆的な取り組みとして大きな注目を集めているところです。また、平成 29 年には 6 年ぶりにマミズクラゲの発生が確認され、マスコミ等でも大きく取り上げられました。

その一方で、予算や人員の制限から、肝心の中野沼の生態系が今現在どのようになっているか、天然記念物に指定する契機となった多様な動植物群はどれほど保たれているのかといった情報は、正確に把握されているとは言えません。

今回の調査は、こうした状況を踏まえ、県の「みどりの県民基金市町村提案型事業」制度を活用し、改めて現状をつまびらかにしようというものです。

調査結果の詳細な内容は、報告書本文に譲りますが、植物を中心に中野沼が今なお県内トップクラスの貴重な生物の宝庫であることが明らかになると共に、その保全は非常に危ういバランスの上に成り立っていることも示唆されました。この報告書は、町民の皆様や自然環境の保全に関心をお持ちの町内外の皆様の学習資料として、また今後のまちづくりの方向を示唆してくれるものとして、大きな意義を持つと思います。と同時に、中野沼を管理する町と文化財行政を所管する教育委員会の責任も改めて痛感しております。今回の調査結果がきちんと今後の行政運営に資するよう、胸に刻んで職務に当たっていきたいと考えております。

結びに、調査の主体として全面的にご協力いただいた町文化財保護調査委員会の青木雅夫委員、委託業務を担当された（株）緑生研究所に改めて御礼申し上げ、巻頭の言葉といたします。

平成 31 年 3 月

邑楽町教育委員会  
教育長 藤江 利久

## 第1章 調査に至る経過

中野沼では、平成8（1996）年に実施された県営水質保全対策事業に伴い、平成10（1998）年7月から9月にかけて、松沢篤郎氏（植物）、関根和伯氏（水生動物）、大森武昭氏（トンボ類）による調査が実施された。その結果、中野沼、特に西沼は水質が極めて良く、生息する水生動物の種類も多いこと、植物も貴重種・絶滅危惧種が多数存在することが分かった。

この調査を踏まえ、邑楽町文化財保護調査委員会は町教育委員会の諮問を受け、学習会と現地視察を実施し、①中野沼全体の自然環境を守っていくべきである。②沼に生息する貴重な動植物を保護する必要がある。③文化財指定を行い、自然環境を守り育てる啓発活動を推進していく必要がある。との認識に立った。平成11（1999）年6月4日、邑楽町文化財保護調査委員会は、中野沼を町指定天然記念物「中野沼と水生動植物群」として文化財指定を行うべきであるとの結論に達し、町教育委員会に答申した。

町教育委員会は、この答申を受け、6月及び7月の定例教育委員会で所管担当者の説明を受け現地視察を行った。その結果、答申どおり、町指定天然記念物「中野沼と水生動植物群」として文化財指定することが決定された。（平成11（1999）年7月28日指定）

既往調査として、島野好次氏が「邑楽町誌（上）、邑楽町（1983）」において、昭和10（1935）年代、中野沼とその周辺の湿地に育成していた水生植物を挙げている。また、松沢篤郎氏、関根和伯氏が平成10（1998）年から平成13（2001）年末まで継続して行った調査結果が「中野沼周縁の植物と水生動物及びその水環境についての調査報告書、邑楽町教育委員会（2002）」としてまとめられ、中野沼の文化財としての意義と価値を再確認し、広く社会に伝えることを目的に発行されている。

本調査は、平成14（2002）年以降、水生動植物群に関する詳細調査が実施されていないこと、平成10（1998）年から平成27（2015）年の18年間で日平均気温は0.8℃、日最高気温の平均値が1.3℃上昇、中野沼中央上層（0m）8月の水質においてもCOD値が3.6 mg/lから4.6 mg/lと上昇しているなど、水生動植物群の生息環境が変化していることを受け、平成14（2002）年に存在した貴重種がどの程度残されているのか、あるいは増えているかを確認することで、中野沼の現状を明らかにし、今後中野沼の維持、保全、管理を継続していく上での基礎資料とすることを目的に実施した。

なお、本調査はぐんま緑の県民基金市町村提案型事業の補助を受け、平成28（2016）年度から平成30（2018）年度に実施したものであり、平成28（2016）年度は水生動植物群調査を、平成29（2017）年度は水生植物群調査、トンボ相調査・マミズクラゲ調査を、平成30（2018）年度は調査結果のとりまとめと印刷製本を行った。

本調査及び報告書の作成については、水生動物群及びトンボ相・マミズクラゲの部分を邑楽町教育委員会が委託契約を締結した株式会社緑生研究所（東京都調布市小島町2-40-10 桐生ビル2F、実施者：小林達彦）、水生植物群の部分を青木雅夫氏（邑楽町文化財保護調査委員）の協力を得た。

## 第2章 中野沼の地勢と沿革

### 2-1 中野沼の地勢

中野沼は群馬県の東南部、邑楽町の東部に位置し、館林市との境界に近い水郷地帯にある。南西から北東にのびる鼓（つづみ）様の形状をもつ農業用のため池である。沼の周囲は約1.2 km、面積は4.4 ha（水表面積3.4 ha）である。

その周辺は水田、台地上の平地林（屋敷林を含む）や畑地、住宅等で形成されており、東側は多々良沼に接している。近くには、一級河川多々良川と一級河川孫兵衛川が流れている。県立森林公園「おうら創造の森」にも近接し、隣接する多々良沼は県の風致地区となっている。このように中野沼は、水辺環境、水田風景、平地林など豊かな自然環境の中にあると共に、その豊かな自然環境を構成する大切な要素となっている。

中野沼の水は、中野の台地などに降った雨水や周辺の水田からの透過水を主とし、さらに側溝等を経由して雨水や生活排水が流入しているものでもある。東沼には水田排水も直接流入しており、一部泥水や汚水の流入も見られる。中野沼内では、水は西沼から東沼をへて、ポンプアップにより孫兵衛川に排出されている。

### 2-2 中野沼の沿革

もともと中野沼は、中野と鶉新田の台地間に広がる湿田の中にあつた面積約17 haの沼であつた。多々良沼の西にあつて、多々良沼同様に下流域数か村の用水ため池として、また遊水池として、その役割を果たしてきた。

大正期までは下中野から鶉新田へ通ずる道路はなく、現在通じている道路（町道7-89号線）は大正期の救済事業の一つとして新設されたものである。現在の中野沼がある町道7-89号線の東側は、かつて官有地で12町2畝3歩（周囲17町20間、面積36,063坪）あり、俗称「江尻沼地」と言われた。そこは、「ウネ」と呼ばれる小さな池が点在する広大な低湿地であつた。「ウネ」は、冬の間水位が低下すると出現し、夏場は広大な池に飲み込まれる存在で、動植物の宝庫であつた。

昭和19（1944）年、戦時下の食糧増産のため関係面積63.4町歩を対象に、排水機場を設置して干拓する区画整理及び干拓事業として調査設計に着手。翌20（1945）年、組合員220名で中野沼耕地整理組合（組合長大舘宇一）を設立、同年2月向野裏で起工式を行った。しかし、毎年大洪水に遭うなど築堤排水干拓事業は意のままにならず、昭和25（1950）年にはついに多々良沼と事業区域を隔てる堤防（現町道幹線2-21号線）の決壊となつた。

中野沼耕地整理組合関係者はこうした困難を乗り越え、昭和27（1952）年3月31日中野沼土地改良区（理事長大舘宇一）に改組し、総工事費1,600万円を投じて昭和43（1968）年春に完成、戦後の食糧増産に大きく貢献することとなつた。

しかしその後まもなく、米の生産量が消費量を上回るようになり、生産調整による休耕を余儀なくされたため、付近は再びアシの密生する原野となつた。また、廃棄物の投棄なども目立つようになった。そこで農地の再開発を目指し、昭和54（1979）年11月、組合員103名をもって中野沼第二土地改良区（理事長大輪清一郎）を結成、浚渫埋立て事業を計画した。東西2か所、3.8 haの水田を、最深9 mまで浚渫し、その揚土で畑地造成を行うというものであつた。2か所の水面は、17.7 haの受益面積を潤すかんがい水となつた。この工事は昭和55（1980）年3月に着工し、総工費3億7千万円余りをかけ、昭和61（1986）年3月に完成を見た。中野沼第二土地改良事業

で誕生した東西 2 か所の水面と両者をつなぐ水路が、今日私たちが見ている中野沼の姿である。